

Under Crescent and Full Moons : Contradiction and Coherence of Muslims in Beijing 1906-1913

その他のタイトル	新月と満月の下で : 北京のムスリムの矛盾と一貫性 1906-1913
学位授与年月日	2017-02-27
URL	http://doi.org/10.15083/00075447

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 海野（山崎）典子

本論文 “Under Crescent and Full Moons: Contradiction and Coherence of Muslims in Beijing 1906-1913”（「新月と満月の下で：北京のムスリムの矛盾と一貫性 1906-1913」）は、20 世紀初頭の北京に暮らした、今日「回族」に区分されるマイノリティ集団を「漢語を話すムスリム (Chinese speaking Muslims)」と定位し、その自他認識や日常実践を、「矛盾しているようでいて、本人たちにとっては首尾一貫した (contradictory yet coherent)」との観点から捉え直そうとするものである。表題の「新月」とはイスラームを、また「満月」とは中国文化を象徴する語として用いられる。また、「矛盾」とは、「漢語を話すムスリム」の自他認識のありようが必ずしも「民族」や「宗教」に集約されるものではなく、日常生活におけるかれらの実践が、「愛国」や「敬虔」といった価値に収斂するわけではない、複雑で曖昧な性格を帯びていたことを指す。

論文は英文で書かれ、序章、本論 6 章、終章からなる。巻末には、附録としてアブデュルレシト・イブラヒム『イスラーム世界』の目次、および参考文献一覧を付す。本文は A4 判で全 288 頁あり、附録・参考文献を含めると総 311 頁になる。

筆者はまず序章で、「漢語を話すムスリム」の近代移行期における経験をめぐって、宗教的な「敬虔」さや政治的「愛国」を強調してきた先行研究を批判的に総括し、そのイスラーム実践において「回」という表象には、民族か宗教かの二項対立の図式には収まらない曖昧で流動的な領域があったことを指摘する。そして、これまでの歴史叙述で使われてきたエスニシティ・宗教・アイデンティティといった概念を再検討し、その上で各時期にあらわれる「回」意識の性格を具体的に考察しなければならないとの問題提起を行う。

第 1 章「歴史のなかの北京のムスリム (Locating Beijing Muslims in a Historical Context)」では、本論文が主要な史料とする新聞『正宗愛国報』が創刊された清末の時期、北京の牛街モスクのアホン（宗教指導者）であった王寛がマッカ巡礼の途上で同時代のイスラーム改革運動に刺激を受けて社会改革にとりかかり、当地のムスリム社会が近代に向けて変容してゆく過程が、歴史的文脈を踏まえつつ叙述される。筆者は、当時北京を訪れたタタール人ムスリム、アブデュルレシト・イブラヒムの旅行記や日本の軍人が残した書簡なども用いつつ、北京のムスリムの生活や風俗の実相を内と外の視点から活写する。

第2章「民族と宗教の交渉 (Negotiating Minzu and Zongjiao)」は、日本経由で清末中国に入った「民族」「宗教」の新語が、ムスリム・エリートによって受容され、辛亥革命に提唱された「五族共和」スローガンとも呼応しつつ、かれらの自己認識やイスラーム実践の枠組みを提供した経緯を検討する。当時のムスリム・エリートや在日ムスリム留学生は、漢語を話す「回」を必ずしも「民族」とは考えず、宗教こそ異なれ「漢」の一員であると主張した。これは、中国共産党によって「回」が「漢」とは区別される一つの民族だと識別される後年の状況とは異なるものであるが、王寛が新疆のテュルク系ムスリムを含めて「回」とし、政府の辺疆政策にも関与しようとしたことが物語るように、当時の「漢」「回」関係に対する認識や「民族」概念は、曖昧で流動的なものであった。

第3章「教育改革、改革派と保守派、オスマン帝国・ロシア帝国 (Educational Reform, Reformists and Conservatives, and the Ottoman and Russian Empires)」は、中東から帰った王寛らが、ロシア帝国のジャディード (新式知識人) やオスマン帝国スルタンのアブデュルハミト 2 世が中国に派遣したムスリムなどの影響を受けて、近代的な科学知識や実学を教授する教育改革に取り組んだことを指摘する。王寛らはムスリムの経済問題の解決のために、実学重視の教育を推進しようとしたが、伝統的なイスラーム教育 (経堂教育) にこだわる保守派からは攻撃され、改革派エリートのなかにも、オスマン帝国への否定的なイメージから王寛の改革案に賛同しないアホンもおり、近代的な教育改革はさまざまな抵抗や遷延に逢着した。

第4章「信仰のための辮髪切除、面子のための辮髪維持 (Cutting off the Queue for Faith, Preserving the Queue for Face)」は、辛亥革命をはさんで中国社会に波及した辮髪切除の動きが北京のムスリムどのように受けとめられたのかを考察する。多くの改革派アホンは辮髪をそもそも反イスラーム的だと見なし、進んで辮髪を剪った。だが、辮髪切除は「国粹」に反するという理由からそうした動きに反対する人々もおり、さらに保守的な上の世代からの批判をおそれて、辮髪切除に慎重な態度をとるアホンもいた。こうした状況が示すように、当時のムスリム社会は「辮髪切除」と同一視されていた「愛国」の意義に完全に同調していたわけではなく、辮髪切除をめぐる分断にはむしろ世代的な要因が強くはたらいた。

第5章「伝承、移住の記憶、そして血統 (Legends, Migration Memories, and Bloodline)」では、中国ムスリムの出自や起源をめぐる記憶の問題が民間伝承にそくして扱われる。史料となるのが、ムハンマドの教友ワッカースの手でイスラームが中国にもたらされたことを伝える『回回原来』『西来宗譜』という二冊の書であり、中国各地のムスリム社会では、こうした民間伝承は真実の「歴史」として解釈され、「回」独自の歴史意識を育んできた。さらに、「漢語を話すム

スリム」が「西域」出身であることは、1930年代になって「回」が一つの民族であることの根拠とされたように、「西来」の「歴史」が「漢語を話すムスリム」にとって、マイノリティとしての誇りや一体感を担保するのに重要な役割を果たした、と筆者は指摘する。

第6章「ハラール問題と清真意識 (Halal Problems and Qingzhen Consciousness)」は、歴史上しばしば「回」と「漢」の摩擦や衝突の原因となってきた食習慣の問題を扱う。『正宗愛国報』では食習慣をめぐる問題に関して、「回教人」の衛生観念の優位を主張する記事が多く掲載された。さらに、非ムスリム中国人を意味する「漢教人」「仏教人」に対しては、偽ハラール食品の取締りをはたらきかけたり、ハラール問題でいがみ合う双方に自制を求めたりする記事も見られた。「回」が民族であることを否定する北京のムスリム・エリートのこうした姿勢は、「回」と「漢」の境界線が、主に食習慣の差異を通じて維持、強化されたことを物語る。

終章では、以上の各章の内容が総括され、20世紀初頭の北京のムスリム社会では、イスラームの教義に反するような「矛盾」したかのごとき生活実践の諸事例が見られるが、アンビバレントに見えるムスリムの言動も、イスラーム社会の存続と安定への願い、さらには「体裁」「名誉」「誇り」の維持という、かれらなりに一貫した論理に貫かれていたとの結論が導かれる。

以上のような構成と内容をそなえる本論文に対して、審査委員会は中国ムスリム社会史の研究に新たな視界を切り拓く、水準の高い力作だとの点で意見の一致を見た。論文の長所として指摘されたのは、以下の3点である。

第一に、従来の研究では、史料の制約もあって、顧みられることの少なかった20世紀初頭における「漢語を話すムスリム」の自他認識のありようを、豊富な史料と一貫した論理で、見事に描き出したことである。筆者は『正宗愛国報』などの漢語一次史料を多く発掘・利用したのみならず、中央アジアで広く読まれていたテュルク語の新聞・雑誌、アブデュルレシト・イブラヒム『イスラーム世界』など、従来の中国イスラーム史研究では扱われることのなかった文献を広く渉猟し、北京のイスラーム社会の状況やアホンらムスリム・エリートの活動実態をはじめて明らかにした。清末民初の北京という限られた時空から、中国ムスリムの長い歴史、および中国近現代史全体を照射し、的確な位置づけを与えたことは、本論文が学术界に果たした特筆すべき貢献だと言える。

第二に、民族や宗教など、中国ムスリム研究をめぐる既存の枠組みや二項対立の図式に疑問を呈し、流動的でアンビバレントに見えるかれらの意識や実践のありようを豊富な事例によって呈示したことである。中国ムスリムを語る際の常套句とされてきた「敬虔」と「愛国」、「宗教」と「民族」、というわかりやすい図式は、ムスリムの近代的改革運動の実態にそくして見た場合、歴史の細

部やダイナミズムを説明する上で十全とは言い難い。むしろ、「矛盾しているようにでいて、本人たちにとっては首尾一貫していた」という観点から、北京のムスリムの生活習慣や改革実践を捉え直そうとする筆者のアプローチは、本論文での生き活きとした歴史叙述を可能にし、先行研究への的を射た批判となっている。「回」意識が曖昧で流動的なものであっただけでなく、「漢」概念ですら一つのブラックボックスであるという筆者の指摘は、歴史叙述におけるエスニシティやアイデンティティ概念の再考を促すばかりか、マイノリティ集団の文化変容を「漢化 (Sinicization)」と結びつけて解釈してきた既往の研究視座に対する理論的な批判となりえるだろう。

第三に、新疆のテュルク系ムスリム地域、ロシア領中央アジア、トルコなどユーラシアのムスリム諸地域、さらに日本といったユーラシアへの広域的な視点に基づいた考察がなされていることである。本論文はユーラシア諸地域との関係性（移動・交流）の文脈において、当時の北京のムスリムの状況を位置づけようという明確な志向性に裏打ちされている。それは、タタール語や中央アジア・テュルク語（チャガタイ語）史料の本格的な利用という点にもあらわれている。19世紀～20世紀における「漢語を話すムスリム」とロシア領や新疆などのテュルク系ムスリムとの具体的な関係性については、既往の研究で本格的に論じられたことはほとんどなく、本論文でその重要な局面が明らかにされたことは、学術上の大きな貢献に数えられる。

そのほか、流麗かつ明晰な英文で本論文が執筆されたことも、審査委員が高く評価した点である。博士論文執筆の時点から、自らの研究成果を広く国際的な場に発信しようと努力する筆者の姿勢は多とすべきである。

もちろん、本論文に若干の欠点や不足がないわけではない。審査委員会では、タイトルに掲げられた時期区分がいかなる根拠で画期性を持つのか十分に説明されていない、との指摘がなされた。それと関連して、第3章から第6章のテーマ選択がやや恣意的ではないかとの疑問も呈された。また、エスニシティ概念の有効性に慎重なスタンスを示すのであれば、「満」など「回」と共通した要素を持つ他のマイノリティにも射程を広げた議論がなされるべきである、との意見も出された。とはいえ、以上述べたような短所は、本論文の学術的な価値を損なうものではない。

総括するに、本論文の達成が中国ムスリム史研究、中国近現代史研究に大きな貢献をもたらしたことは疑いない。したがって、本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定した。